

平成21年11月11日

報道機関各位

会津さざえ堂を愛する会

旧正宗寺三匠堂（通称：「さざえ堂」）構造調査報告会の開催について

「会津さざえ堂 いまとこれから」実行委員会では、旧正宗寺三匠堂（通称：「さざえ堂」）構造調査報告会を開催することとしましたのでお知らせいたします。

先般、福島県会津若松市の飯盛山に現存する「会津さざえ堂（以下、「本建築物」といいます。）」の構造調査を行いました。本建築物は目視で傾きが分かる状況ですが、新たに本構造調査により「柱と梁の接続部に抜けの現象」が数多く発見されました。

このたび、その調査結果を発表するとともに、本建築物の重要性について議論し、具体的な保存活動に移行する必要性の有無について検討するため、報告会を開催するものです。

本建築物の歴史的価値及び見解は後述いたしますが、現在は国重要文化財に指定されております。しかし、保存状態は決してよいものとはいえません。

その保存を検討すべく、有志が集まり始めたのは3年前のことでした。今では、会津若松市の有志と東京藝術大学、東京大学生産技術センターとのネットワークが生まれ、本建築物の保存活動をどのように立ち上げるかという段階に来ております。

詳細は別紙資料に記載いたしましたが、本建築物を通し、建築技術の継承や歴史的建築物の保全、その活動の源泉等につき問題提起を行いたいと考えております。

当日は会津若松市の菅家市長にお越し戴き、別紙のパネラーと共に議論をすることにより、建築史的観点、建築価値的観点から、本建築物の価値を再認識し、今後の活動の方向性を導き出したいと考えておりますので、よろしく願いいたします。

< 建築物見解 >

日本大学理工学部教授故小林文次博士によると、「さざえ堂二重らせんの発想は、日本の仏堂建築の伝統から突如として異質の構想が産まれたとは考えられない。享保五年（1721）の洋書解禁によりオランダから輸入された洋書の中に、秋田藩主で画家であった佐竹曙山のスケッチ帳にある二重らせん階段がある。これはロンドン出版のモクソン（1627～1700）著の写しであり、これを通じて一部に知られている事実があった。これは遠くダヴィンチにまで繋がっているものであり、これらとさざえ堂のつながりは定かではない。しかし西欧の例が単なる通路であったのに対し、中心部に観音像を配し、あたかもライトのゲーゲンハイム美術館を思わせるような会津さざえ堂は単なる模倣ではなく天才的な創造と見るべきである。」（「さざえ堂と飯盛家」より抜粋。）

【問い合わせ先】

「会津さざえ堂 いまとこれから」実行委員会 東京大学生産技術研究所 腰原研究室内
Tel: 03-5452-6842 Fax: 03-5452-6841 Mail: mokuzo@iis.u-tokyo.ac.jp

旧正宗寺三匠堂（通称：「さざえ堂」）構造調査報告会

「会津さざえ堂

いまとこれから」

2009年 11月 14日（土） 13:30～16:00

於：東京大学生産技術研究所 An棟コンベンションホール



【主催】会津さざえ堂を愛する会

【お問い合わせ】

「会津さざえ堂 いまとこれから」実行委員会

Fax: 03-5452-6841 Mail: mokuzo@iis.u-tokyo.ac.jp

旧正宗寺三匠堂（通称：「さざえ堂」）構造調査報告会

「会津さざえ堂 いまとこれから」

第1部

報告会 (13:30 ~ 16:00)

1. 挨拶

趣旨説明：六角鬼丈（東京藝術大学名誉教授）

主催挨拶：佐藤誠次（「会津さざえ堂を愛する会」副会長）

企画挨拶：神山和郎（「社団法人 日本住宅建設産業協会」理事長）

2. 基調講演

「巡る建築 その価値と魅力」 鈴木博之（青山学院大学 教授）

3. 調査報告

腰原幹雄（東京大学生産技術研究所 准教授）

4. パネルディスカッション

菅家一郎（会津若松市長）、鈴木博之、六角鬼丈、熊倉純子（東京藝術大学 准教授）

進行役：腰原幹雄

第2部

懇親会 (16:00 ~ 17:00)

旧正宗寺三匠堂（通称：さざえ堂、国重要文化財指定）は、西暦1796年の造立（新編会津風土期による）で、堂には郁堂和尚の筆になる寛政9年の扁額が残る。

さざえ堂は、仏堂建築としては、他に例を見ない特異なもので、六角形平面をもち、六本の心柱（円柱）と同数の隅柱（六角柱）を駆使して、二重螺旋のスロープで作り上げられている。

正面から入ると、右回りに螺旋状のスロープで登り、頂上の太鼓橋を越えると降り左回りスロープとなって背面出口に通ずる。スロープの内側に沿って西国札所の三十三観音像が祀られ、一度入ると巡礼を終えたことになるという、いわば江戸時代における庶民のための身近な巡礼の建物であった。

今般、社団法人日本住宅建設産業協会の協力のもと、東京大学生産技術研究所にて「会津さざえ堂の構造性能評価」を執り行った。その結果、螺旋構造建築による構造的歪みによる「抜け出し」という現象（柱と梁が外れた状態）が多く見受けられた。

本報告会にて、調査結果をもとに会津さざえ堂の「いま」を再認識するとともに、「これから」、文化財の保存活動について考える。



鈴木博之（すずき・ひろゆき）
青山学院大学 教授

東京大学工学部卒業後、大学院に進み、1974年東京大学工学部専任講師、1975年までロンドン大学コートールド美術史学研究所に留学。東京大学助教授を経て教授に就任。2005年に紫綬褒章を受賞。2009年より現職。



六角鬼丈（ろっかく・きじょう）
東京藝術大学 名誉教授

東京藝術大学美術学部建築科卒業後、磯崎新アトリエを経て、1969年六角鬼丈計画工房を開設。1991年より東京藝術大学教授。2009年より同大学名誉教授。



熊倉純子（くまくら・すみこ）
東京藝術大学音楽環境創造科 准教授。

パリ第十大学、慶應義塾大学卒業後、1992年から2002年まで（社）企業メセナ協議会に勤務。企業のメセナ活動や芸術普及プログラムなどの研究・開発に携わる。専門は文化支援、アートマネジメント。2002年より現職。



腰原幹雄（こしはら・みきお）
東京大学生産技術研究所 准教授

東京大学工学部建築学科卒業後、構造設計集団<SDG>を経て、2001年東京大学大学院建築学専攻助手、2005年より現職。

【参加申込方法】

参加費：無料 懇親会費：¥1,000

氏名（ふりがな）・所属（会社名または学校名）・連絡先（メールアドレスまたは電話番号）・シンポジウム参加申込人数・懇親会参加申込人数をご記入の上、メール又はファクシミリにて、下記問い合わせ先までお送り下さい。

【問い合わせ先】

「会津さざえ堂 いまとこれから」実行委員会

東京大学生産技術研究所 腰原研究室内

Tel: 03-5452-6842 Fax: 03-5452-6841

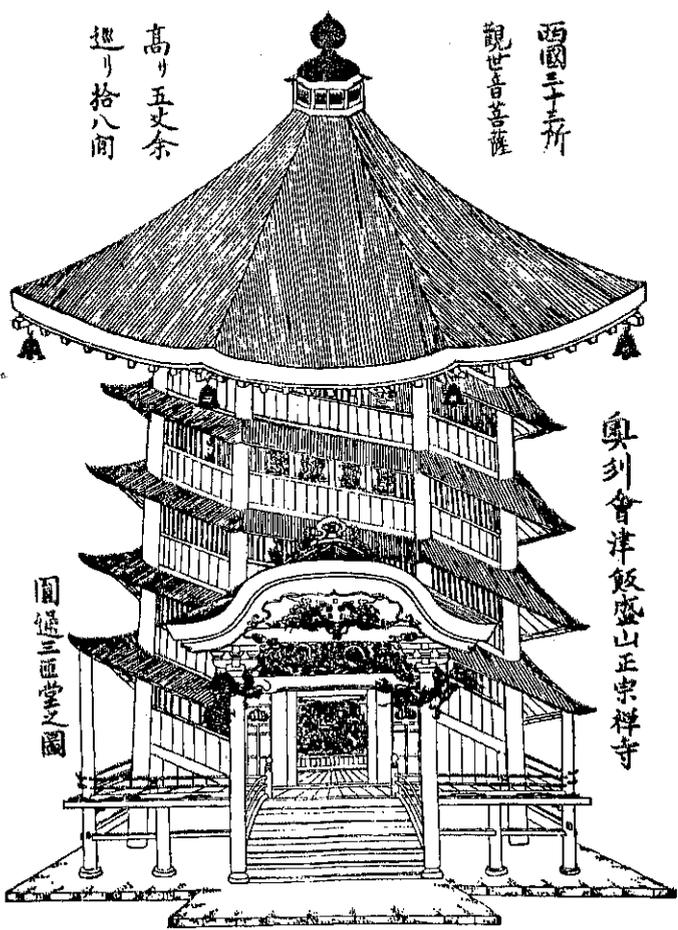
Mail: mokuzo@iis.u-tokyo.ac.jp



〒153-8505 東京都目黒区駒場 4-6-1
東京大学（東京大学生産技術研究所）駒場リサーチキャンパス

日本大学理工学部建築史研究室

円通三匠堂(七ざざえ堂)実測図



西園三匠所
觀世音菩薩

高り五丈余
廻り拾八間

奥州會津飯盛山正宗禪寺

圓通三匠堂之圖

目録

一 正面図

二 平面図

三 断面図

四 大屋根見上図

五 解説

日本大学理工学部教授
工学博士

小林 文次

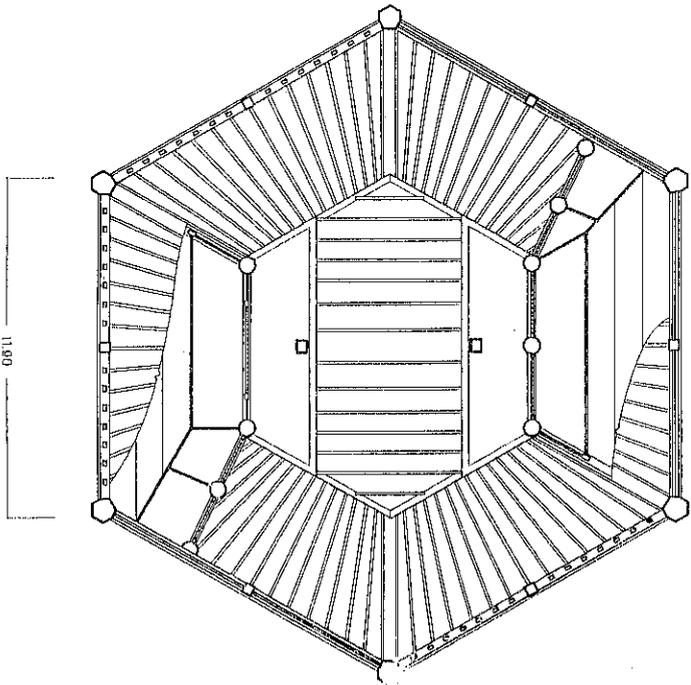
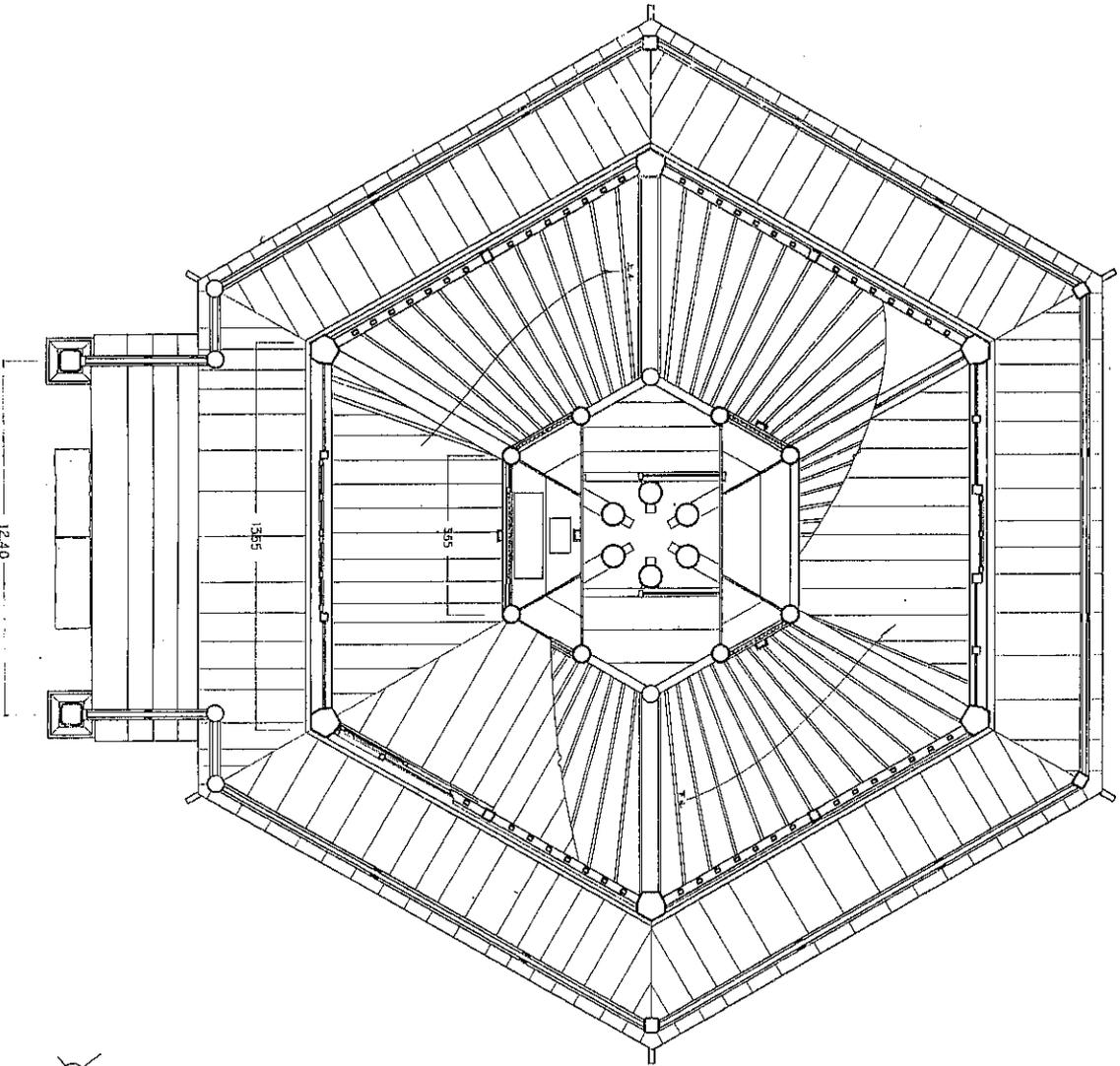
山主 飯盛本家版

GROUND PLAN

福島県 旧正宗寺三市堂平面图

縮尺三十分の一

T O P PLAN

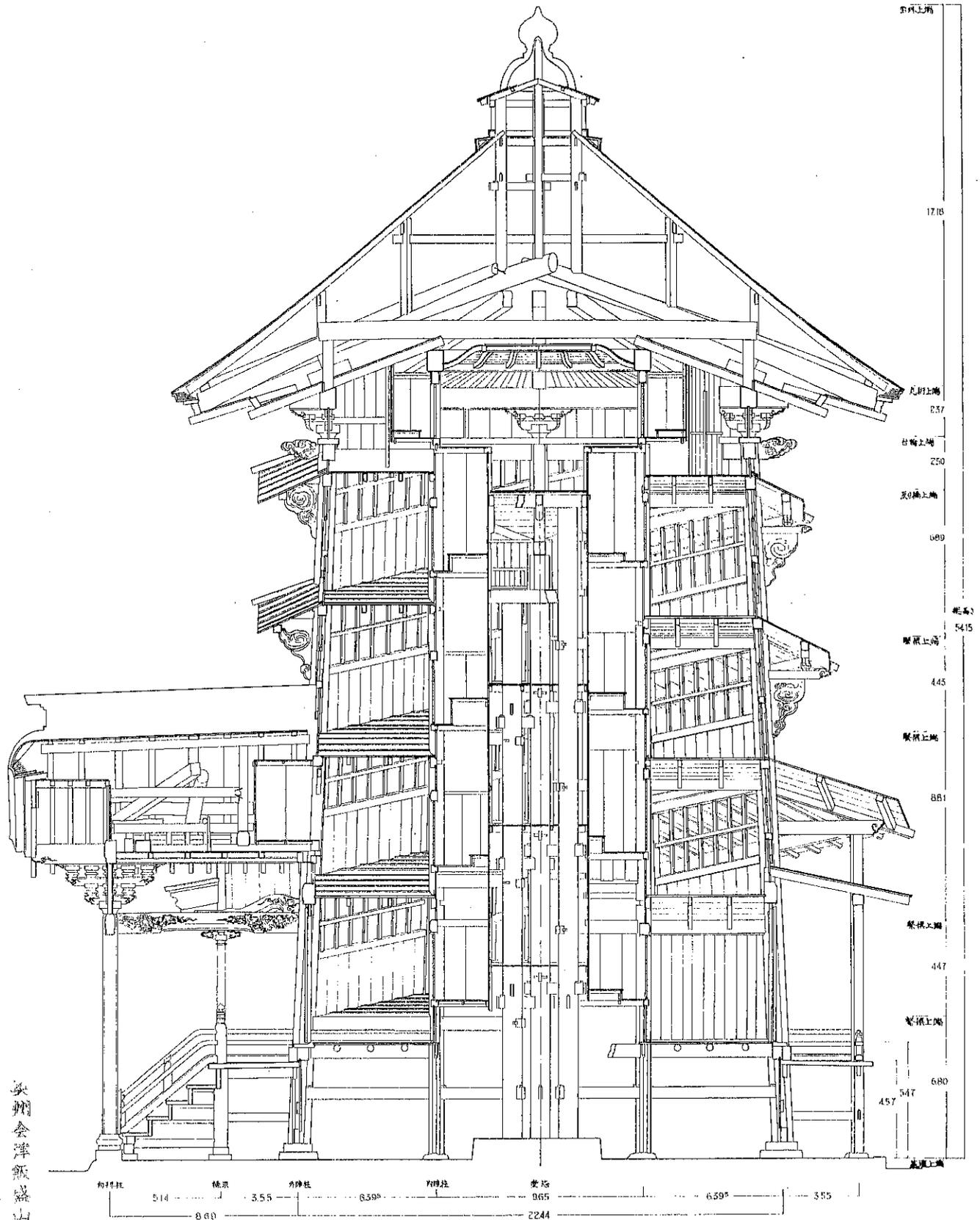


山主飯盛本家

奥州会津飯盛山正宗寺遺跡

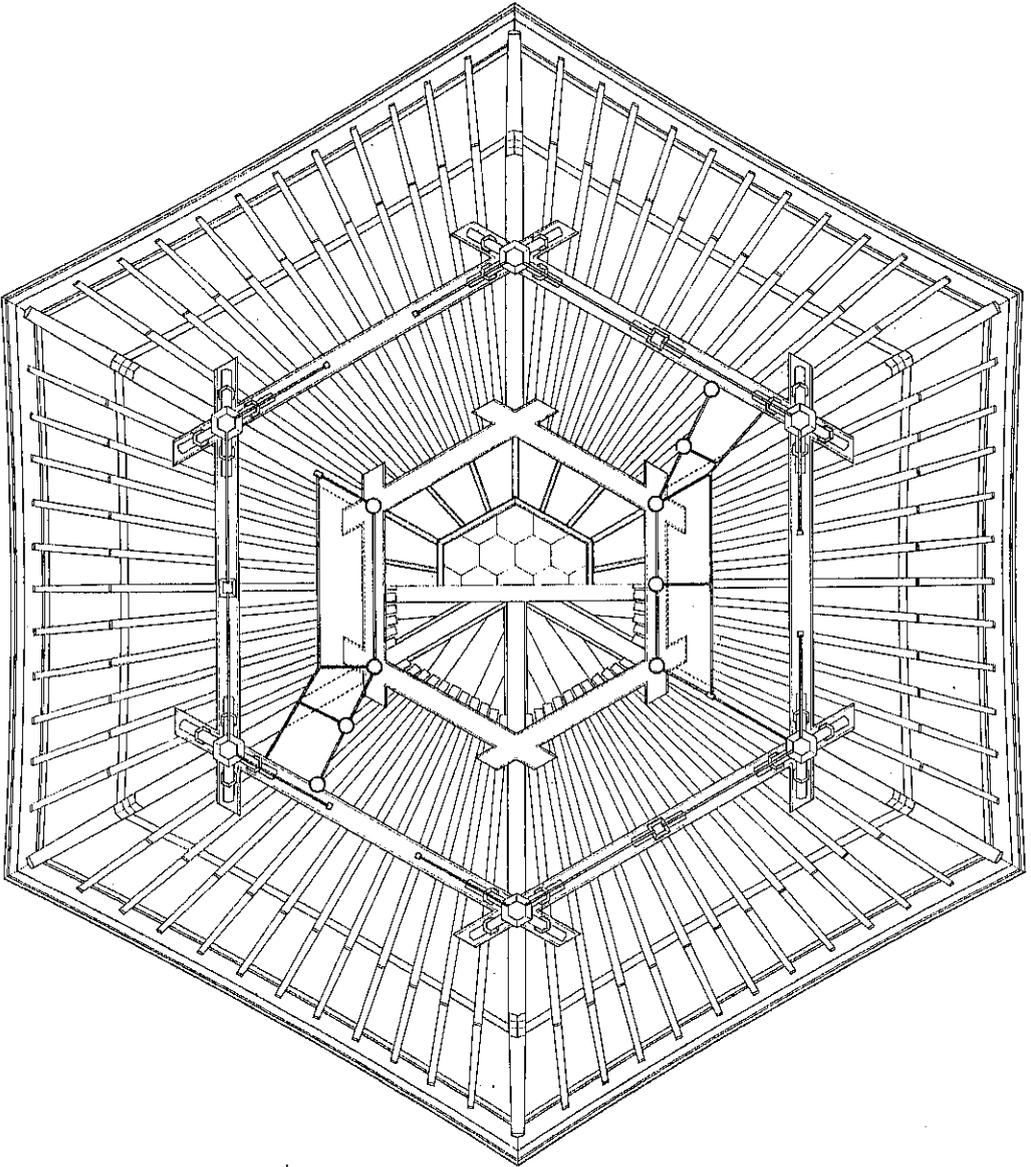
断面図

縮尺三十分、一



山王飯盛本家
 茨州会津飯盛山正宗寺雜踏

ROOF SEEN FROM BELOW



大屋根軒見上図

縮尺三十分、一

奥州会津飯盛山正宗寺継跡
山主飯盛本家

さざえ堂と飯盛家

山主飯盛本家当主 飯盛正日（いいもりまさになち）

飯盛家と飯盛山正宗寺

私が幼少の頃、伯父叔母などから「このさざえ堂は二百年になったら必ず国宝になる。」と言われたことが強く記憶に残っていたが、果して建立二百年目（寛政八年 1796）に当たる昨年平成七年六月に、国重要文化財に指定された。このことは、我が生涯にとって最大の感激である。

飯盛家の現住居は、旧飯盛山正宗寺（しょうそうじ）そのものであり、さざえ堂よりも五十年ほど古いとされている。もともと飯盛山正宗寺は、歴代の領主より宗像神社（現巖島神社/いつくしまじんじゃ）の別当として、飯盛山霊域を拝領し、神仏混合によって守護し続けてきたものである。正宗寺最後の住職は私の曾祖父に当たる僧宗潤（そうじゅん）であり、後に名を飯盛正隆（まさたか）と改めた。

戊辰戦争に下級武士として従軍した、祖父佐藤正信（まさのぶ/湊町大字原在住の元藩医佐藤青龍の次男で白川戦線にて負傷）は、妻きん（滝沢字坂下在住の渡部しんの娘で正隆の姪）と共に、戦後正隆の養子となった。明治初年の神仏分離令に際し、檀家のない寺でもあったので、廃寺して神道を取り、正信は巖島神社初代の宮司となった。

これにより、仏殿は神殿となり、本尊彌陀仏、さざえ堂三十三観音像、庭前の唐金大仏（一丈六尺）等は、他寺院に移転された。また、飯盛山の所領は新政府から地券により購入、登記を受けるためには大なる資金が必要となった。この資金を調達するため、我家は貧窮を極めた由であるが、円通三匠堂（えんつうさんそうどう/通称さざえ堂）、宇賀神堂は本宅の付属の建物として、境内は宅地として所有管理することとなったのである。また巖島神社は郷社の社格を与えられその境内は村役場の管理する所となった。第二次大戦後、本神社は、宗教法人神社庁の系列下で、滝沢部落の崇敬人総代以下が守護管理している。

戊辰敗戦後の飯盛家と飯盛山

祖父正信は、家計を助けるため一時単身沼尻（ぬまじり）硫黄鉱山の帳場に職を求め、明治二十一年（1888）の磐梯山大噴火に際会したが、命拾いして帰宅したそうである。祖母きんは、さざえ堂脇に茶店（現飯盛本店の原点）を営み、家族は農耕蓄養に従事する等、第二次大戦後の生活建て直しにも似た様相であった。しかし、飯盛山の参詣客も会津以外の地からだんだん増加することにより、社堂の管理、店舗の経営を主とする家業を確立していった。

その間に、正信長男正利（まさとし）は郡役所に奉職、次男正光（まさみつ）は家に残り農耕、牛馬の飼育に、三男正成（まさなり）は陸軍士官に、四男正章（まさあきら）は鉱山技師にと志を立てた。

戊辰戦争以来、さざえ堂は顧みる人も少なく、屋根の修理もままならず狐狸の巣と形容せられるまでに荒れ果てた由である。

ついでながら、飯盛山の白虎隊墓所は、明治四年（1871）に仮埋葬の地妙国寺（みょうこくじ）から自刃の地飯盛山に改葬された時に、祖父正信が松平公に約二反歩を献上寄附したものである。さらに、昭和三年の拡張に際しては、先々代伯父正利が約二反歩を追加献上寄附した。いずれも、地租は飯盛家が第二次大戦終戦まで納めていたが、戦後、財産税などの関係から財団法人弔霊義会に移管せられた。

明治二十三年のさざえ堂大修理

明治二十三年（1890）には冨田治作（とみたじさく）氏をはじめとする会津有志の方々が発起人となり、広く寄附を集めて、白虎隊士合葬の墓を自刃十九士銘々の墓に改葬された。

これと同時に、荒廃したさざえ堂にも大修理が施され窮状を脱することができた。

この時、堂内には観音像なきあと、旧藩士出身彫刻家大橋知伸（おおはしちしん）田中治八（たなかじはち）両氏の手による白虎隊十九士の霊像が祀られ、拝観者が堂内を巡って参拝できるようにした。しかし、明治三十七年（1904）に至り、参拝客がさざえ堂の入場者のみに限定せられる不利を解消するため、霊像は隣接する宇賀神堂（うがじんどう/巖島神社の傍社として五穀の神を祭った二間四方のお堂。寛文年間 1661～1677 建立）内に並立合祀せられた。そして、さざえ堂内には、替って会津藩子弟の道德教本として第八代容敬（かたまたか）公の命により編纂された「皇朝二十四孝」（こうちょうにじゅうしこう）の絵額が掲げられ今日にいたっている。

大正年間と昭和初期

大正四年（1915）には屋根葺替（ふきかえ）工事がなされた。

大正七年祖父正信没後、その長男正利が跡を継いだ。昭和四年地元一箕村長在職中に死去した。その跡は三男である私の父正成が継ぐことになった。正成は、陸軍中佐退役後大阪市役所十年間の奉職を経て、昭和六年（1931）に帰郷してその事業に当たった。この際本家は、従来病人続出（結核等）の弊を防ぐため、正宗寺以来の曲屋（まがりや）を取り除き現状のように改築した。

昭和七年には、さざえ堂従来のこけら葺き屋根の上に銅板を重ねて葺き、耐久を図り面目を一新した。

大東亜戦争後

昭和二十八年（1953）には、永年経過のため傾斜が甚だしくなった堂宇の引起し工事を、地元の金田作四郎（かねださくしろう）大工の手に依り行った。補強材、金具締め等により傾斜はほぼ復旧し、昭和三十九年の新潟地震（会津地方は震度四～五）にもよく耐え凌いだ。

昭和四十年の学術調査

さざえ堂が世界的に認められたのは、昭和四十年（1965）日本大学理工学部教授故小林文次（こばやしぶんじ）博士の学術実測調査によってである。当時文部技官であった現日本大学工学部教授佐藤平（さとうひとし）工学博士が、小林教授に会津さざえ堂の情報を提供したことが発端となった。小林教授は、この二重らせんスロープ構造の建築に魅せられて、実測調査をはじめとし、国内のさざえ堂、さらに世界のらせん形建築について研究を拡め、これを学会に発表された。そして、会津さざえ堂は「世界唯一の二重らせんスロープを持つ木造建築」であり、「模倣ではなく天才的な創造」と評価されたのである。

この実測調査は、当初市当局に持ちかけられたが、予算の関係で当家が進んでお願いした。この年の夏期休暇に、教授以下研究室OBで当時文化庁建造物課勤務の丸山時男技官はじめ四～五名の研究室の学生が二十日間当家に合宿し、寝食を共にして作業に専念した。当時私は自衛官存職中で不在であったが、家内が本店経営の傍ら、中学生の娘二人を手伝わして食事宿泊の一切を世話した。今でも当時を思い出しては、先生や学生の皆さんに、手料理を喜んでもらったことが忘れられないと語っている。

ちなみに、学術調査の翌昭和四十一年には、会津鶴ヶ城の再建大工事が竣工し、飯盛本店新館（展望台約七五坪）も落成した。

小林文次博士の推論と評価

博士は推論として、「さざえ堂二重らせんの発想は、日本の仏堂建築の伝統から突如として異質の構想が生まれたとは考えられない。享保五年（1721）の洋書解禁によりオランダから輸入された洋書の中に、秋田藩主で画家であった佐竹曙山（さたけしよざん）のスケッチ帳にある二重らせん階段の原図がある。これはロンドン出版のモクソン（1627～1700）著の写しであり、これを通じて一部に知られている事実があった。これは遠くダビンチにまでつながっているものであり、これらとさざえ堂とのつながりはさだかではない。しかし、西欧の例が単なる通路であったのに対し、中心部に観音像を配し、あたかもライトのゲーゲンハイム美術館を思わせるような会津さざえ堂は単なる模倣ではなく天才的な創造と見るべきである。」と述べられている。

なお、私等が先々代伯父正利、先代父正成から伝えられた説によれば、考案者郁堂（いくどう）和尚は、当時江戸をはじめ諸国にあったさざえ堂にならい、建立の構想を練っていた時、或夜二重紙繕り（にじゅうこより）の夢を見て「これだ」とこの構造を思いついたという。私の小学生の頃（昭和初期）でも、紙繕りは手工の時間に実習させられたものであり、二重、多重の紙繕りも教えられたことを思えば、あながち不自然な発想ではないと感じている。

昭和五十八年（1983）に教授が病を得て六五歳にて早世されたことは返す返すも残念である。

昭和五十年屋根大修理

昭和四十五年（1970）私は、自衛官生活 18 年間で定年退職、帰郷して家業に戻った。

昭和四十七年から三ヶ年に亘り大屋根、庇屋根、向拝（こうばい/玄関にあたる。）屋根の抜本的修理を行った。すなわち、垂木（たるき）の交換追加補強、野地板更新、銅板総葺替え等である。湊町柄澤（みなとまちへざわ）の渡部丑吉（わたなべうしきち）大工、花春町の渡部守男（わたなべもりお）屋根職の手に依ったが、従来のように、台風ごとに屋根銅板が吹き飛ばされるような心配はなくなった。

昭和五十七年県重要文化財指定

昭和五十六年にわが滝沢部落にある国重文の旧会津藩滝沢本陣横山家住宅（通称御本陣。昭和四十六年 1971 指定。）が解体修理を受け、その完成後、文化庁文部技官がさざえ堂を訪れ視察されたが、特に沙汰はなかった。

昭和五十七年（1982）一月には、県重要文化財指定申請書を提出した。その添付書類の殆どは小林文治博士の作成された図面及び論文であった。

同年三月三十日、県重要文化財としての正式指定書が交付された。

平成六年擬宝珠落下事故

平成六年（1994）二月二十二日にさざえ堂擬宝珠（ぎぼし）石の落下事故があった。当日は前日から暴風雪であった。午後五時頃一大突風により、さざえ堂南側台上にある甲霊義会二階建て展望休憩所のトタン屋根南半分（約六坪）が剥落した。それが、連結したまま飛来してさざえ堂頂上部に覆い被さり、風圧を受け、擬宝珠石約 250kg が脱落、大屋根に二回弾んで向拝前方に大音響とともに落下した。トタン屋根に覆われたまま 50cm の積雪下に沈んだため当日は判らず、翌朝頂上を眺めて脱落を知った。屋根には落下点に径約 30cm の穴が空き、次の衝突点には 60cm 平方の陥没を生じた。運良く堂内に貫通を免れ大被害を受けなかったこ

とは不幸中の幸いであったが、先年の屋根修理に際して垂木の倍加補強が有効であったと思われる。

これが復旧工事については種々検討したが、先ず屋根を修理した後、辛うじて小型のクレーン車を石鳥居（旧参道中間）の下を潜り抜け推進できたので、江川組の手に依り吊上げ復旧作業が完成し、一同胸を撫で下ろした。

文化庁正式調査

平成六年十一月、さざえ堂の国重要文化財指定を前提に文化庁の調査が行われることになり、三日間実施された。調査官は女性若手の栗林久美子文部技官であった。

初日十一月十六日は、午後から調査官が県及び市の文化課員立ち会いの上取り敢えず一巡したが、私の案内説明により天井裏を上り擬宝珠の直下の小窓まで、また床下の土台石まで積極的に見分された。県、市の職員も随行が大儀のようであった。第二日は、昭和五十年修理担当渡部丑吉老大工や屋根除雪担当玉川久光（たまがわひさみつ）林業職を呼び寄せ説明を受け、特に安全ロープを身につけ、ブーツ履きで玉川氏と一緒に頂上小窓から急勾配の大屋根上に出て修理箇所を実見されたことには驚嘆した。私は勿論、県、市の職員もいささか疲労気味でただ見守るだけのうちに、女性技官の毅然果敢な職責遂行には流石と敬服の他なかった。かくして精密な計測調査の後、帰京された。

平成七年国重要文化財指定とさざえ堂周辺の整備

平成七年（1995）五月十九日、国重要文化財指定が内定したことが新聞報道され、六月二十七日付にて公式指定、官報に掲載された。

与謝野文部大臣の正式の重要文化財指定書は、平成八年七月十三日、県文化課を通じて送付せられ受領した。この報とともに、親族各位から早速に祝意と祝金が寄せられた。たまたま平成五年から七年初めにかけて、膨大な寄附を受けて白虎隊土墓前及び参道石垣大修理を完成した飯盛山白虎隊霊域整備委員会（会長は甲霊議会議事長、筆者は副会長の一人）の工事に対応して、私もさざえ堂周辺環境整備工事を計画していたので、この基金を有り難く戴きこれに充てた。すなわち、本堂境内地の拡張と、飯盛山本（旧）参道上甲霊義会用地との境にある七段の石段を廃し、安全な坂道への改良工事などを施工することができたことは幸せであった。

終りに

本堂は畏くも

大正天皇 明治四十一年九月十日

昭和天皇 大正十三年八月二十日

今上天皇陛下 昭和四十三年八月二日

それぞれ皇太子に在わしますとき、三代に亘り親しく御登臨の栄に浴したのである。

今回、国重要文化財指定を受けたことは、飯盛家一族の名誉であり、その責任の重さに身が引き締まる思いである。今後の保存、整備、運営については、全力を尽くして献身し、国はじめ県、市御当局並びに地元の方々の御指導御支援をいただき、その御期待に背くことのないよう覚悟している所である。

平成八年八月十四日

旧正宗寺三匠堂（さざえ堂）の建築

日本大学理工学部教授

工学博士 小林 文次

1. 用途と建造年代、後世の修理

本さざえ堂は宗像神社境内にあり、もとはの正宗寺が別当寺として神社ともども管理していたが、明治初年の神仏分離の際、正宗寺が廃止され、現在はその寺跡を守る飯盛山主飯盛本家にぞくしている。

建造の目的と年代について、新編会津風土記に以下のように記されている。

田通三匠堂 一王門ノ南一段高キ處ニアリ、六椽ニシテ三層ナリ。下ニテ差渡シ三間半、高八間半、漸漸ニ登テ頂ニ至リ、又漸漸ニ降りテ下ニ還リ、栄螺ノ殿中ニ似タルユエ、栄螺堂下モ云。升降道ヲ異ニス。本尊弥陀、又三十三観音ノ木造ヲ安ス。

寛政八年造立セリ

以上によつて本さざえ堂は、他のさざえ堂と同じく順礼観音堂であり、上り下り道を異にする順拜路の設けられた、特殊な建築であつたことが分る。棟札はないが、藩主松平家の『家世集記』巻二五四、寛政九年六月二〇日の条に、芝居興行に関して

去年二月中実相寺願に依而、栄螺堂建立助情のため、日延の儀申出任願候とあるのを見ると、このさざえ堂を寛政八年（一七九六）の建立とするのは至当と見られる。正宗寺は、実相寺の末寺であり、そのため実相寺が建設資金調達のため、芝居の日延しを願ひ出たのである。

若松市の山岸清次氏所蔵のさざえ堂の本版画（同様版木は飯盛家にも所蔵）を見ると

奥州会津飯盛山正宗禪寺

田通三匠堂之図

西国三十三所

観世音菩薩

高サ五丈之余

巡リ拾八間

の書入れがあり、堂の外観見取図が示されている。これによつて西国三十三所の観音札所の写しが中に安置されていたことが分る。外観に関しては現状と大差ないが、各柱間の間柱と筋違いがなく、風鉋など現在失われているものの存在が知られる。

建造後の江戸時代における修理については明かでないが、維新以後は明治二三年、同三二年、大正四年、昭和二八年に夫々修理の行われたことが、堂内に残る銘記などによつて知られる。この中で特に大修理とみられるのは、明治二三年の修理で、これについては、上記の山岸清次氏所蔵の当時の『栄螺堂修理主意書』（明治二二年一月）に荒廃の様子を次の様にのべている。

——維新ノ始メ廢寺トナリ仏像趾ヲ留メス、僅カニ扁額ヲ存ス、爾來修繕ノ途ヲ絶チ、既ニ荒蕪ニ属セントスルヲ憂ヒ、地方ノ有志者屢々修補ノ計画ヲ為スト雖モ時機至ラズシテ空シク歳月ヲ経タリ、今ヤ屋上破レ、庇廂落チテ、全宇風雨ニ暴露シ、殆ト頽廢シテ遂ニ狐狸巢栖ノ處トナルニ至ラントス——

この『主意書』には、飯盛山全体のスケッチが挿図として載せられ、そこに屋根が破れ、壁板もとび、倒壊寸前の本堂の姿が描かれている。これは決して誇張とは思われぬ当時の本堂の状態と思われる。三十三の観音像も已に失われていた。したがつてこの明治二三年の修理は、かなり徹底したもので、この際に細部の改築の行われたことも考えられる。

2. さきえ堂建築の現状

A 全体の構成

全高一六・四五米、塔状の木造六角堂、正面向拜付、屋根銅板葺（庇屋根板葺）、廻縁をまわす。内部は二つのらせん状斜路からなり、頂上にて太鼓橋によって連絡される。この斜路に沿って厨子が設けられ、参拜者は上り下りの一巡の間に、厨子内に納められた本尊、西国三三観音像（共に亡失）を参拜できるように計画されている。

B 入口廻り

正面向拜、一間、向唐破風付、三斗組二手先斗拱、正面二重虹梁透し彫々刻あり、桁行緊虹梁、打上げ格天井、登り勾欄あり。勾欄は廻り縁につづき、切目縁。向拜銅板葺。正面入口棧唐戸棧番つき西開。背面棧唐戸片開き棧番つき。入口上に都堂葺の「福聚梅」の額を掲ぐ。

C 外廻り軸部

主柱は大面取六角柱で上部運減、内転びあり。六本の中五本まで近年の根継ぎがある。腰板は縦張り、押縁なし。宮台下端と柱側面に柄差しとした筋違いが用いられている。

D 宮と間柱

宮には角格子を入れ、採光にあてる。主柱間に間柱を用うる。

E 軒庇

下鷹では檼を用い、支柱で支えられ、銅板葺。上方の庇は板庇、主柱につけた持送り板によって支えられる。持送板は絵様つきで、すべて絵様は相違している。

F 斜路

中心の六本の芯柱へ一個の礎石上に立つ一と六本の主柱との間に、緊梁が両端とも柄さし、込み栓打でとめられている。この緊梁の高さは、順次六〇・六匁（二尺）つづき高く設けられ、したがって正面から背面に半巡すると一八一・八匁（六尺）の差ができて、反対側から別の斜路の始まる空間的余裕を生み出している。根太はこの緊梁にかけられ、床板が張られる。根太も床板も、本末ねじって納めらるべきものであるが、ここでは無理に捻って納めた様である。床面には巡り止の棧が打たれている。

G 内陣廻り

芯柱と主柱とを結ぶ緊梁上に菅柱を立て、内陣厨子を設ける。現状では斜路に沿って一九の厨子と、用途不明の空所六ヶ所、また假設的とみられる厨子が背面出口に近く二ヶ所作られている。現在は三三観音像に代って皇朝二四孝子の絵額などが納められている。これらの厨子の配置、構成は創建以来のものとは考えられないが、本来どのように本尊阿弥陀仏、三三観音像が配置されていたかは、興味ある今後の調査課題である。各厨子の腰壁には、賽銭（もとは洗米）を入れる木製の樋が出ていて、この樋は中心でまとめられ、二本の箱樋で床下につづき、芯柱の礎石中心部に賽銭が自然に流下し、集められるようになっている。

H 斜路連絡橋と天井

上記の二つの斜路は、二廻り半で頂部において太鼓橋によって連絡されている。太鼓橋は六本の芯柱の上に架かる。天井は六角形の折上げ鏡天井で、鏡板に亀甲型の板を組合わせて用うる。

1 大屋根の軒廻り

主柱には頭貫を入れ、台輪をおく、柱貫の鼻は線型になっているが、柱貫が柱を貫通してなく、別々に取りつけられる。台輪上に大斗をおき、軒組は三斗の出組、中備には一部葺敷を入れる。軒は二軒で隔樵とし、二丁隅木、切面戸、布葺甲とし、木負、茅負とも投げ勾配は緩い。

2 大屋根と宝珠

銅板葺、上に露盤、石製の宝珠をのせる。

3. 本さざえ堂の建築上の価値

もともとさざえ堂（三匠堂）は、観音札所願礼という民間信仰に基いて案出されたもので、江戸本所の羅漢寺に安永九年（一七八〇）に造立されたのが最初であった。*このさざえ堂は方形プランで重層、内部は三階で各階を秩父、本國、西國の各札所にあてて、計一〇〇体の観音像をいれた願礼観音堂であった。惜しくもこのさざえ堂は明治初年に取壊されたが、この建築形式の系統をひくさざえ堂の例は、曹源寺（群馬県太田市）、長傳寺（茨城県取手市）、成身院（埼玉県児玉町）などに現存している。これらに対し、本さざえ堂は六角塔の形式をとり、中に二重のらせん状の斜路を組み合わせ、それに沿って西國三三観音像を安置したもので、建築計画の上からみて誠に卓抜したものというべきである。この構成は、新編会津風土記のいう「漸々にのぼり……漸々に降りて……に当り、遺構の上からも創立以来の計画とみて間違いない。これはさざえ堂としても、またわが國の仏堂建築としても稀な構想で、機能にかなった、合理的な設計である。材料や技術の上で難はあるものの、江戸時代における建築計画上、極めて価値ある例と思われる。

*小林文次『羅漢寺三匠堂考』日本建築学会論文報告集、